

## 教授の娘

次の日、昼食の時間に学生は目を覚まし、窓の外を見ました。

「ついているぞ」と彼は言いました。

「ここに赤いバラがある。非常に美しい赤いバラだ。長いラテン語の名があるに違いない」  
彼は木からバラを摘み取りました。

彼は帽子をかぶり、教授の家へ走って行きました。

教授の娘はドアのそばに腰掛けていました。

「ごらんなさい、あなたにささげる赤いバラです。約束した通り、あなたは今夜、僕と踊らなくてはなりませんよ。あなたは心臓の近くにそのバラをつけ、そして僕は『あなたを愛しています』  
と言うのです」

少女はほほ笑みもせず、彼を見ました。

「ごめんなさいね」と彼女は言いました。

「私、その色は気に入らないわ。私のドレスは青くて、そのバラは赤いんだもの。それにもう一つ、侍従の息子が私に宝石をくれたの。宝石がお花より高価だって誰もが知っているわ。私はあなたのバラの花なんか知らない」

「あなたはひどい恩知らずだ」と学生は怒って言うと、道にバラを投げました。

ちょうどその時、荷馬車が通り過ぎ、車輪がその花を押しつぶしました。

「あなたってとっても無礼ね」と少女は言いました。

「私はあなたとではなく、侍従の息子と踊るわ」

そして彼女は立ち上がり、家の中へ入って行きました。

学生は家へ向かって歩き始めました。

「愛などばかげたものだ」と彼は言いました。

「僕は本を勉強する方がいい。もっとずっと興味深いし、役にも立つ…。そう、論理は愛よりずっと役に立つ。家に帰って、哲学と形而上学を勉強しよう」

そして、彼はそうしたのでした。